

図子浩二先生のご逝去を悼む

日本コーチング学会会長 朝岡正雄

図子浩二先生が2016年6月2日にお亡くなりになりました。コーチング学の一般理論構築に向けたわが国最初の本格的な専門書の出版を目指して、日本コーチング学会が出版委員会を立ち上げたのは2015年度になってからでした。その後、目次の作成と章ごとの分担責任者の選定を行い、各章の内容と執筆者について調整し、2016年3月初旬にようやく執筆者への原稿依頼を行った矢先に、中心的な存在であった図子先生の突然の訃報に接し、関係者一同驚くばかりでした。

図子先生は1995年3月に筑波大学体育科学研究科を修了され、筑波大学体育センター準研究員、鹿屋体育大学助手、同助教授、教授を経て、2009年からは筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授、そして2012年からは同教授として体育専攻学生の教育にあたってこられました。図子先生の研究生活は、大学院修士課程におけるプライオメトリクスを用いた跳躍選手のトレーニング法に関する研究から開始されました。そして、このテーマは、その後29年間にわたって、先生ご自身が研究を続けられただけでなく、教え子たちの研究テーマとして研究の幅と深さを増しながら、その成果を実践に応用する道を着実に切り拓いて来られました。

図子先生の研究業績の中で特筆すべきは指導論文が並外れて多いということです。筑波大学体育センター準研究員として奉職された1995年から、鹿屋体育大学助手を経て、同助教授になられるまでの6年間は先生が筆頭の研究が専門誌に多数発表されています。しかし2001年以降は、先生の筆頭論文だけでなく、先生がセカンドオーサーとなっている論文が年を追うごとに急速にその数を増して行きます。この傾向は、2009年に筑波大学に移ってから継続し、2016年度には、ご自身の筆頭学術論文は1本であるのに対して、コレスポンデントオーサーとして指導した論文が11本に上るという驚異的な指導業績を残されておられます。しかも図子先生の指導スタイルは、研究をスポーツ実践に直接貢献できるようにするという先生ご自身の研究哲学を貫かれて、常に指導現場で学生、そして選手とともに試行錯誤を繰り返し、工夫と改善を繰り返しながら研究を進めてゆくというものでした。このために、52歳という年齢で急逝された先生には指導中の学生も多く、先生ご自身にも計り知れない心残りがあったことと推察されます。また、2010年以降には、コーチング学を実践学として構築しなければならないという立場から新しいコーチング学の構築に向けて数々の提言を発表されたことは、この春に出版される日本コーチング学会編集の『コーチング学への招待』の内容構成に大きな影響を与えるとともに、われわれの学会の今後の発展に対して明確な指針を与えるものとなっています。

このように、図子先生の生涯は、常にスポーツの現場にあって、実践に役立つ科学的研究を確立しようとする熱い思いを学生たちに伝え、何よりも後進を育てることに捧げられてきました。これから10年以上にわたってわが国のスポーツ科学の発展に大きな貢献が期待されていただけに、先生の早すぎるご逝去に無念の思いが一杯です。日本コーチング学会の多くの仲間たち、そして多くの弟子たちに多大の影響を与えていただいた先生の生涯に感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。